

明治維新
150年

「岩倉使節団」を改めて考える

私どもは自分がどんな顔の間人であるかを知っている。自分を「鏡」という他者に投影して、みずから確認しているからである。自己が他者をもたず完全に孤立している状態にあっては、自己がどんな存在であるかを確認することはできない。それゆえ「自我形成」もあり得ない。私どもは他者が自分をどう認識し、評価し、対応するのかに応じて、自己を初めて悟り、自我形成をつづける、そういう存在である。



拓殖大学学事顧問
前総長
渡辺 利夫

そうだった。自国とは成されたのだとみる。何か一という自我は薄くしか形成されてこなかったのである。アヘン戦争を経て大國・清國が、列強によって次々と蚕食されていくさまに目を見開かされ、ペリーの黒船来港によって強烈なインパクトを受け、日本の指導者は新しい自我形成を余儀なくされた。

日本よ 新しい自我形成に自覚めよ

この平和の中で、日本は欧米列強に競合できるような産業力や軍事力を整えてきたわけではない。

「海洋の共同体」としての日本は、四方を海で囲まれ、海によって守られ、外敵の存在を意識することなく、国内の統治に万全を期して、平和はおのずと守られてきた。

少なくとも幕末までは、列強の目に映る日本は、文明国ではない。だからこそ、不平等条約を押しつけられたのだ。危機から日本を脱却させるには主権国家としての内実を整備し、みずから文明国となるより他に道はない。そういう新しい自我が形

に示すものが岩倉使節団の欧米派遣である。それは外務卿である岩倉員視を特命全權大使とし、副使に参議の木戸孝允、大蔵卿の大久保利通、工部大輔の伊藤博文、外務省次官補格の山口尚芳の4名を、専門の調査事

に、不測の事態を想定して7000名に及ぶ御親兵を集めたうえで、その遂行によって、初めて明治維新がなされたと言っている。廃藩置県を敢行、幕藩体制を切り崩したばかりの時期であった。

用意されていなかった。廃藩置県が成り、旧体制は崩れたとはいえず、どういふ国づくりをやったらいいのか、明治政府にはその具体像がどうしてもつかめない。そこで、文明国の文明国たるゆえんを、新政府の執行部が自分の目で観察しようとしたのである。幕末に強圧的に結ばされた不平等条約の撤回も、使節団の目的であった。しかし、最初の訪問国、米國で不平等条約改正は時期尚早であることにすぐ気がかされる。

務官、随員、留学生43名を加えた総勢108名の大デレゲーション(派遣団)であった。明治維新政府の中枢部がデレゲーションを組んで、米國、英國、フランス、ドイツ、ロシア、その他、全12カ

これに不満をつのらせる旧藩の諸勢力が、各地で反抗の刃を研いでいた。新政府の中枢がこぞって2年近くも日本を留守にすることなく、想像さえできない不穏な時期であった。しかし、明治政府はそれをあ

府は列強に就航させたのだろうか。他者たる文明国を、政府のトップが身をもって徹底的に研究し、自我形成をより優れたものにするためであった。維新に成功したとは、主権国家の国づくりのテキストは何も

中央集権と地方分権の均衡のうえに成立してきたこのシステムを、一挙に廃止して中央集権的国家とする。府県を設置して中央政府の意を体した知事を中央政府から府県に派遣し、この知事が全権をもって地方を統治するといふ「革命」であった。それにしても、この

条約改正には、国内統治を完全なものとするための法制度の拡充、生産力と軍事力の増強を図ることが不可欠である。第9条の改定にすら逡巡し、「モリカケ」だの「日報」などをテーマに政争をつづけてやむことがない。

その後の富國強兵・殖産興業政策が、さらには憲法と議会制度が次々とあきれるほどの速さで実現されていったのは、岩倉使節団の体得した知恵があったからだといっても過言ではない。

これほどの「自我形成」を往時の日本の指導者はやったのである。米國の覇権力が後退し、中国の膨張がともどもない。朝鮮半島は一触即発の様相を呈している。この状況にあつてなお日本は、憲法第9条の改定にすら逡巡し、「モリカケ」だの「日報」などをテーマに政争をつづけてやむことがない。

「事の軽重」がわからなくなってしまうほどに、日本の政治は劣化してしまつたのか。日本よ、新しい自我形成に自覚めよ。